

雑書

Vol.2 2023年7月

『雑書』について

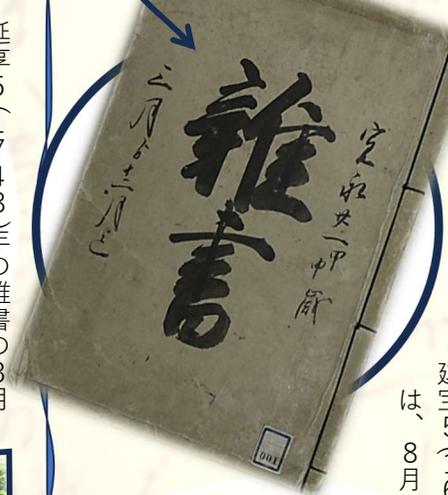
盛岡には、盛岡藩の政務を取り仕切ってきた家老が、197年間にわたって当番制で記録し続けた「雑書」という史料があります。下の写真が、江戸時代前期の寛永21(1644)年の雑書で、現存する中で最も古いものです。別名を「盛岡藩家老席日記」ともいわれ、日付とその日の天候の後に本文を記載する日記形式の記録となっています。



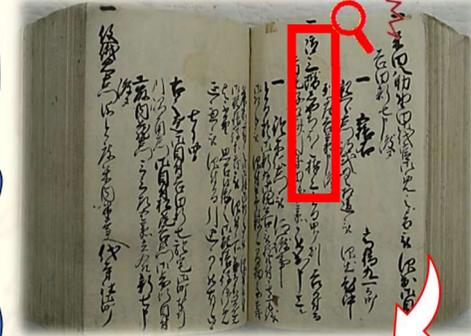
も少しだけ、古文書解読体験！してみませんか？

第2回目となる今回はこの広報誌タイトルのモチーフともなっている「雑書」の中の盛岡城について、探ってみたいと思います。

「雑書」からは、どのような盛岡城の姿を窺い知ることができるのでしょうか。みなさま



延宝5(1667)年の雑書では、8月20日に『御三階祈禱』の記録があります。雑書からは、その建物の使われ方についても、読み取ることができます。



この宝永6(1709)年の雑書には、『御三階しゃちほこ棟上』の文字があります。先年の大風で、本丸三階櫓の鯨が落ちてしまったため、修繕を行っており、この年の7月4日にその鯨を棟上したという記録です。ここからは、後の天守となる三階櫓には、この時期も鯨のついていたということが確認できます。

延享5(1748)年の雑書の3月14日の記録には、二ノ丸東側の大書院下通に石垣を取りつけたことが書かれています。これは、いわゆる「はばき石垣」のことで、孕んできた石垣の崩壊を防ぐため、その箇所を外側から抑えこむように築かれた石積みのことです。



跡公園に訪れた際には、江戸時代に築かれたこの石垣を、ぜひ探してみてください。

この大書院下通の写真に写っている部分とその「はばき石垣」です。「雑書」に記録が残るこの石垣は、現在も盛岡城跡にその姿を確認することができます。

※「盛岡城日記雑書」で使用しているタイトルの背景やお城のイラストなども、もりおか歴史文化館収蔵の史資料を活用させていただいております。

盛岡城小噺

#利直と利家と家康

盛岡藩初代藩主南部信直だけでなく、2代藩主利直も、全国に名を馳せた諸大名との関わりがあります。

南部利直の「利」は、豊臣秀吉と信直との関係構築に大きく関わった、加賀の前田利家から与えられたものです。利直は、幼名を彦九郎と言いましたが、天正18(1590)年、前田利家を烏帽子親として元服し、名を「利直」と改めたとされます。

また、江戸幕府の初代将軍である徳川家康とも鷹や砂金の献上などにより交流を深めており、その信任は厚く、慶長19(1614)年の大坂冬の陣においては、徳川方として出陣をしています。

この関係構築が実を結び、寛永11(1634)年には、利直の嫡子である3代藩主重直が、徳川家光から陸奥国10郡10万石の旧領を安堵される判物を受けます。これにより、豊臣秀吉から安堵された領有権は江戸幕府によっても公認され、南部氏は、明治期の廃藩置県まで、200年以上にわたり盛岡藩を統治することとなりました。

利直は、藩の体制を整備するとともに、盛岡城築城においては総指揮を執り、城下の町割も行うなど、ハード、ソフトの両面において、盛岡藩の基盤の構築に尽力しました。まさに、盛岡藩政確立の礎を築いた立役者であるといえますが、残念ながら、盛岡城の完成を見ることなく、寛永9(1632)年にその生涯を閉じました。

盛岡城復元調査推進室の取組の詳細は、市ホームページに掲載しています。盛岡城に由来があると伝わる資料や建物等に関する情報などありましたら、盛岡城復元調査推進室(019-613-7956)まで、情報提供をお願いします。

